

**開宗850年キャッチコピー
「お念佛からはじまる幸せ」の
教義的解釈の研究**

— 報告書 —

浄土宗

研究班：

浄土宗総合研究所「開宗 850 年キャッチコピーの教義的解釈の研究」プロジェクト

はじめに

近年、各学問領域において「幸福論」の研究が活発に進められ、「幸福度」を測る視点がさまざまに提示されている¹。「幸せ」という感覚が社会的要因や個々の主観に委ねられているという事実を浮き彫りにしているが、本キャッチコピー「お念佛からはじまる幸せ」における「幸せ」については、当然ながら「法然上人のみ教え」「浄土宗の教え」といった教義的視点に立った解釈が求められる。当研究所に本キャッチコピーの「教義的解釈」が求められる所以である。とはいえ、今回のキャッチコピーは広く社会に発信されるものであり、その「言葉遣い」はこれまで念佛と接点のなかった人びとをも意識したものと見え、ロゴマークと併用される場合も多いと想定される。教義的解釈にあたっては、その点も留意しておきたい。なお、本稿では、本キャッチコピーにならい「念仏」は「念佛」と表記する。他の「仏」は当用漢字のままとする。ただし引用文については「念仏」を用いた。

本報告は、はじめに「お念佛からはじまる幸せ」について総論を述べ、次いで各論に入ることとする。

総論 「お念佛からはじまる幸せ」とは

まずはじめに、本キャッチコピーを教義的に解釈する際の要点を示そう。浄土宗において、念佛の「佛」とは「阿弥陀仏」を意味する。称名の念佛実践を通じた「阿弥陀仏に願われているこの私」という自覚からはじまる「幸せ」ということになるだろう。以下、大まかな解釈を示す。

1. 「幸せ」と念佛の関係 ～「お念佛から」を中心に～

阿弥陀仏の極楽浄土は「諸もろの楽のみを受く」²世界であり、そこでは永遠に続く「真の幸せ」を感じることができる。そして私たちを極楽浄土へと救い摂ろうとする「阿弥陀仏の願い」には分け隔てはない。それが「大慈悲」と称される阿弥陀仏の御心である³。

「阿弥陀仏の願い」は「南無阿弥陀仏」というお念佛の言葉に託されている⁴。お念佛を

¹ 近年の「ウェルビーイング」（幸せ）研究には枚挙にいとまがない。本報告書に関連するもの、つまり宗教と幸せを取り扱う最新の研究としては、櫻井義秀「人は宗教で幸せになれるのか：ウェル・ビーイングと宗教の分析」（『理論と方法』32(1)）、同『しあわせの宗教学：ウェルビーイング研究の視座から』（法藏館、2018）をあげることができよう。

² 「阿弥陀経」（『浄土宗聖典』1・316）

³ 例えば「津戸三郎へ遣わす御返事」では「阿弥陀仏の御誓には、有智無智をも簡ばず、持戒破戒をも嫌わず、仏前仏後の衆生をも簡ばず、在家出家の人をも嫌わず、念仏往生の誓願は平等の慈悲に住して発こしたまいたる事にてそうらえば、人を嫌うことは全くそうらわぬなり。されば『観無量寿経』には「仏心とは大慈悲是なり」と説きてそうろうなり。善導和尚この文を承けては「この平等の慈悲をもて遍く一切を摂す」と釈したまえるなり。一切のことは広くして漏るる人そうろうべからず。」（『浄土宗聖典』4・518）と述べられている。

⁴ 『選択本願念仏集』3における「名号はこれ万徳の帰する所なり。然ればすなわち弥陀一仏の所有する四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功德、皆ことごとく阿弥陀仏の名号の中に撰在せり」（『浄土宗聖典』3・118）という法然上人の名号観から導き出せるだろう。

称える人こそが「阿弥陀仏の願い」と結ばれ「願われている私」となるのである。「お念佛からはじまる幸せ」は「お念佛が深まりゆくなかでの幸せ」へと育ち、「儂い幸せ」をも見つめ直し、来世、極楽浄土での「真の幸せ」へとつながっていく。

2. 「お念佛からはじまる幸せ」とは

私たちは幸せと不幸が移ろいゆく生活のなかで、儂い幸せを追い求めてしまう「愚者」にほかならない。それゆえに時に絶望を味わうことになる。しかしながら阿弥陀仏が「お念佛を称える人」を選び分けることはない⁵。ここでいう「お念佛から」とは、教義的には信機信法の観点から、我が身を「愚者」と自覚しながらも「願われている私」と信じてお念佛を称えることと解釈するのが適切であろう。同じく「からはじまる幸せ」とは、愚者が愚者のまま「願われている私」と信ずるなかに「天に仰ぎ地に臥して悦ぶべし、この度弥陀の本願に会うことを」⁶といった生きる希望が灯ることを意味しよう。そして、そのようなお念佛の生活を続けるならば、日常生活のなかに念仏往生（凡入報土）という未来が組み込まれ、「生けらば念佛の功積もり、死なば浄土へ参りなん。とてもかくても、この身には思い煩うことぞなき」⁷といった心境がもたらされ、そこに「お念佛が深まりゆくなかでの幸せ」が生まれるのである。そのような心境においては、「現世の儂い幸せ」であっても、来世、極楽浄土での幸せへとつながっていく大切な経験に思え、「儂い幸せ」が「暮らしのなかの幸せ」へと変換されるのである。そして念佛生活を終えたならば、「諸もろの楽のみを受く」阿弥陀仏の極楽浄土へと往生が叶い、すなわち凡入報土により、永遠に続く「真の幸せ」を感じることができるのである。

3. まとめ

人はそれぞれに「幸せ」を求めている。しかし、それは不幸と背中合わせの移ろいゆく「幸せ」であるかもしれない。阿弥陀仏はすべての人びとの「真の幸せ」を願っている。私たちは「南無阿弥陀仏」と念佛を称えることで「阿弥陀仏の願い」に気づくことができる。称えることが、信じることであり、「気づき」にほかならない⁸。どのような人生であれ、阿弥陀仏に「願われている」との「気づき」が心を豊かにし、そこを出発点に日々の暮らしのなかにおのずと「幸せ」を見出すようになるのである。

以上を本キャッチコピーに対する教義的解釈としたい。

⁵ 『観無量寿経』には「光明、徧く十方世界を照らして、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず」（『浄土宗聖典』1・300）と説かれている。法然上人は『無量寿経釈』において「今、念仏往生の本願は有智・無智・持戒・破戒・多聞・少見を簡ばず、在家・出家を簡ばず」（『浄土宗全書』9・318下）と説いている。

⁶ 「一紙小消息」（『浄土宗聖典』6・287）

⁷ 『四十八卷伝』21（『浄土宗聖典』6・283）

⁸ 『四十八卷伝』21「常に仰せられける御詞」に「また云く、「仏、阿難に告げたまわく、汝、好く是の語を持て。是の語を持てとは、すなわちこれ無量寿仏の名を持てとなりと言えり。名号を聞くというとも、信ぜずば聞かざるがごとし。たとい、信ずというとも、唱えざれば信ぜざるがごとし。ただ常に念仏すべきなり」（『浄土宗聖典』6・280～281）とある。

各論

1. 解釈の方針 ～法然上人の視点に沿って～

法然上人は「開宗の文」⁹（善導大師『観経疏』）を通じて念佛による「凡入報土」の教えに出会った。その際、「高声に」念佛を称え「感悦隨に徹り」「落涙千行なりき」と感激したと伝えられる¹⁰。「お念佛からはじまる幸せ」については、浄土宗を立教開宗するに至った法然上人のご心情を「幸せ」の基点として解釈に臨んだ。

2. 「幸せ」に関する理解の四段階 ～極楽浄土を「幸せ」の究極とする～

「幸せ」を、現世における「幸せ」と来世における「幸せ」との二段階に分けて捉えて現益と当益の位置付けをなし、さらに現世における「幸せ」を三段階に分けて理解する方針を立てた。

まず現世における「幸せ」の第一段階として、念佛と出会う前の「幸せ」を設定し、それを「現世での働き幸せ」「暮らしのなかの幸せ」と位置付けた。

次いで第二段階として、念佛を称えることから始まる「幸せ」を設定し、これを「念佛からはじまる幸せ」と位置付けた。

さらに第三段階として「お念佛が深まりゆくなかでの幸せ」を設定した。

そして念仏往生を遂げ凡入報土を果たした上で感得される、来世、極楽浄土における「幸せ」を、「幸せ」の第四段階として「幸せの究極」「永遠の幸せ」「真の幸せ」と捉えることとした。

結果、「幸せ」を四段階に分けて理解することとなった。

こうした方針は、「幸せの究極」「真の幸せ」は極楽浄土にあるとし、凡入報土を願い求める視線のなかに現世今生での「幸せ」がおのずと見出せるようになるとした考えに基づく。

3. 四段階の説明の手順

2. に基づいて四段階に分けた「幸せ」の理解を促すために、念佛に出会う前の第一段階「現世での働き幸せ」、ついで究極、第四段階の「真の幸せ」、第二段階「お念佛からはじまる幸せ」、第三段階「お念佛が深まりゆくなかでの幸せ」の順で説明する。

文末に図式を掲載するので、参照されたい。

① 第一段階「現世での働き幸せ」 ～苦しみと背中合わせ～

私たち人間が生き物である以上、「若さの維持」「健康」「長寿」などを願い求め、それら

⁹ 「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥も、時節の久近を問わず。念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に」『観無量寿仏経疏』散善義（『浄土宗聖典』2・294）

¹⁰ 『十六門記』（『浄土宗全書』17・6下）

の実現に「幸せ」を感じることに不思議はない¹¹。とはいえ、この世が無常である限り、そうした「幸せ」は儚くもいずれ終焉を迎える。「幸せ」が永遠に続きますようにと願って日々の暮らしを営む私たちにとって、「幸せ」が「苦しみ」に変わる瞬間である。

この世の「幸せ」は「苦しみ」と背中合わせであり、「幸せ」の永続を願えば願うほど、私たちは「四苦八苦」に代表される苦悩につきまといられるのである。そればかりか、さらなる生死を引き起こす行為を繰り返す。それが凡夫であり、愚者であり、人間に他ならない。人間であればこそ、得ることのできない幸せの永続を求めて苦しみ、六道を輪廻してしまうのである。それゆえ「厭離穢土」の教えが説き示される。

② 第四段階「真の幸せ」 ～凡入報土～

阿弥陀仏は①で見たような私たち凡夫の姿を哀れみ、極楽浄土を建立し、私たちの念佛往生を叶え続けている。極楽は

衆もろの苦あることなく、ただ諸もろの楽のみを受く。¹²

と説示される世界であり、そのような世界に私たち凡夫、愚者を迎え入れてくださる御仏は阿弥陀仏以外にはおられないというのが法然上人のみ教えである¹³。念佛による往生（凡入報土）を叶え、極楽浄土において感得される「幸せ」こそ阿弥陀仏より与えられた「永遠の幸せ」であり、「真の幸せ」に他ならない。私たち凡夫にとっては「お念佛からはじまる幸せ」の究極に位置付けられる。そこに「欣求浄土」の教えが説き示されるのである。

③ 第二段階「お念佛からはじまる幸せ」 ～絶望から希望へ～

「みずから煩惱を断ち切ることこそ仏道である」¹⁴とするならば、愚者である私たち人間は、みな仏教から完全に切り残されてしまうしかない。そこに愚者の絶望があり、苦しみ、悲しみがある。

しかし、他でもないその愚者が一人残らず幸せにならんことを願っているのが阿弥陀仏である¹⁵。法然上人が、

¹¹ 例えば厚生労働省が2014年に公表した「健康意識に関する調査」では、幸福感を判断する際に最も重視されるものが「健康状況」であることが明らかにされている。具体的には半数以上（54.6%）の人が幸福感を判断するにあたり、健康を重視していることが示されている。

¹² 「阿弥陀経」（『浄土宗聖典』1・316）

¹³ 例えば『登山状』に「すべて薄地の凡夫弥陀の浄土に生まれん事他力にあらざばみな道絶えたるべき事なり」（『浄土宗聖典』4・505）と説かれるなど、弥陀の他力に依る以外に、浄土往生の術なきことが指摘されている。

¹⁴ 法然上人はこのような仏道を聖道門としてとらえ、『往生大要抄』において「この娑婆の世界にありながら断迷開悟の道を聖道門とは申すなり」（『浄土宗聖典』4・300）と述べ、また『登山状』では「聖道門というは穢土にして煩惱を断じて菩提に至るなり」（『浄土宗聖典』4・497）と述べている。

¹⁵ 『浄土宗大意』には「浄土宗のころは、聖道・浄土の二門をたてて、一代の諸教をおさむ。聖道門というは、娑婆の得道なり、自力断惑出離生死の教なるがゆえに、凡夫のために修しがたし、行じがたし。浄土門というは、極楽の得道なり、他力断惑往生浄土門なるがゆえに、凡夫のためには、修しやすく行じやすし。その行というは、ひとえに凡夫のために、おし

月かげの いたらぬさとは なけれども ながむる人の 心にぞすむ¹⁶
と詠まれた歌がある。「月かげ」を阿弥陀仏の光明、大慈悲の譬えとして、「ながむる人」が念佛を称える人の譬えとして解釈することができよう。私たちは念佛を通じて「阿弥陀仏の願い」と出会うのである。

「厭離穢土」「欣求浄土」という教えが示されているにもかかわらず、愚者はこの世に執着してしまう¹⁷。しかし阿弥陀仏による念仏往生という救いの教えは、愚者が愚者のまま人生を歩むことを許し¹⁸、愚者が自身の幸せを願うことを許し、愚者が愛しき人の幸せを祈ることを許す教えであり、阿弥陀仏から「真の幸せ」を「願われている私」と信じてお念佛を称えるなかに、生きる希望に出会える教えなのである¹⁹。念仏往生の教えとの出会いがあり、お念佛を称え「愚者の自覚」を持つならば、阿弥陀仏の大慈悲、救いのなかに、生きる希望と出会える「幸せ」を感じることができるのである。それこそが「お念佛からはじまる幸せ」であろう。法然上人が

天に仰ぎ地に臥して悦ぶべし、この度弥陀の本願に会うことを²⁰
と説き示される通りである。

なお、念佛を称えることは、「願われている私」と気づき、阿弥陀仏を信じることと同義と位置付けたい。

④ 第三段階「お念佛が深まりゆくなかでの幸せ」

阿弥陀仏の大慈悲、救いの教えと出会うことから感得する「お念佛からはじまる幸せ」は、念佛の生活を続けるなかに、やがて、法然上人が

善導の三縁の中の、親縁を積したまうに「衆生仏を礼すれば仏これを見たまう、衆生仏を称うれば、仏これを聞きたまう、衆生仏を念ずれば、仏も衆生を念じたまう。かるが故に阿弥陀仏の三業と行者の三業とかれこれ一つになりて、仏も衆生も親子のごとくなる故に親縁と名づく」とそうろうめれば、御手に数珠を持たせたまいてそうらわば仏これを御覧そうろうべし。御心に念仏申すぞかしと思召しそうらわば仏も衆生を念じたまうべし。されば仏に見えまいらせ念ぜられまいらす御身にてわたらせたまわんずるなり²¹

と示されるような、御仏に「生かされている幸せ」「見守られている幸せ」へと深まり、さらには

えたもうところの願行なるがゆえなり」（『昭法全』四七二）とある。

¹⁶ 『四十八卷伝』30（『浄土宗聖典』6・482）

¹⁷ 『無量寿経』五悪段（『浄土宗聖典』1・267～278）は、そのように生きる衆生の姿を描いているといえよう。

¹⁸ 「禅勝房に示す御ことば」における「念仏申す機は生まれつきのままにて申すなり」（『浄土宗聖典』4・432）といったお言葉から導かれよう。

¹⁹ 例えば明遍僧都が法然上人に「念仏の時、心の散乱するをば如何がし侍るべきや」と質問し「欲界の散地に生をうけたるものの心、あに散乱せざらんや。其の條は源空も力およばず。唯心は散乱すれども、口に名号を称すれば、仏の願力に乗じて、往生疑いなし。所詮唯念仏の功をつむべきなり」とお答えになったところ「明遍悦びて則ち退出す」と伝わる逸話などから導かれよう（『昭法全』六九四）。

²⁰ 「一紙小消息」（『浄土宗聖典』6・287）

²¹ 『浄土宗聖典』4・550

生けば念仏の功積もり、死なば浄土へ参りなん。とてもかくても、この身には思い煩うことぞ無きと思ひぬれば、死生ともに煩い無し。²²

離れ難き輪廻の里を離れて、生まれ難き浄土に往生せむこと、悦びの中の悦びなり。²³
との心境に至るのである。

⑤ 「儂き幸せ」の価値変換

①において「現世での儂き幸せ」を幸せの四段階のうちの第一段階、すなわち念佛に出会う前の「幸せ」として設定し、終焉を迎えて「苦しみ」に変わる「幸せ」であるとして否定的な位置付けを施した。しかしながら、「第二段階」や「第三段階」の凡入報土を願い求める視線を具えた立場、あるいは三心が具わっていく身の立場から振り返るならば、儂い幸せであっても極楽浄土での幸せにまで、つながっていく可能性を秘めたものとして、ポジティブに評価することができよう。「現世での儂き幸せ」がおのずと「暮らしのなかの幸せ」へと変換されるのである。²⁴

そして「現世での儂き幸せ」を極楽浄土での幸せにつながっていく「暮らしのなかの幸せ」としてポジティブに受け入れることができるならば、「家庭にみ仏の光を」「社会に慈しみを」「世界に共生を」²⁵と願うことができるのであり、あるいは「明るく」「正しく」「仲よく」と心がけることができるのである。そこまで含めて「お念佛からはじまる幸せ」と言うことができるであろう。

こうした点については、『逆修説法』における阿弥陀仏の「清浄光」「歓喜光」「智慧光」に関する説示が参考となろう。すなわち阿弥陀仏の光明が念佛申す愚者の三毒（貪瞋痴）を滅していくなかに展開され得ると指摘できるのである²⁶。

4. 誤解なき理解のために ～愚者の自覚とは～

愚者の幸せを思う阿弥陀仏の大慈悲を自分自身の問題として捉えるためには「愚者の自覚」が必要であり、「愚者の自覚」なくしては、「お念佛からはじまる幸せ」の出発点に立つことはできない。本キャッチコピーの教義的解釈においては、「幸せ」の起点として「愚者の自覚」（信機）が重要な意味を持つのである。ここで一点、注意を促しておきたい。それは、「愚者」という言葉の意味合いを誤解なく理解していただきたい、ということである。

²² 『四十八巻伝』21（『浄土宗聖典』6・283）

²³ 「一紙小消息」（『浄土宗聖典』6・286）

²⁴ 『四十八巻伝』45において法然上人が述べる「現世を過ぐべき様は、念仏の申されん方によりて過ぐべし」という一文は、このことを表す一文である。すなわち念佛の妨げとなるものは「厭い捨つべし」と否定されるが、それが念佛を唱えるための支えとなるならば「念佛の助業」として「大切」なものになる（『浄土宗聖典』6・704～705）。これは念佛の実践を通して、現世の価値が再評価されていると理解することができよう。

²⁵ 浄土宗21世紀劈頭宣言

²⁶ 『逆修説法』三七日において法然上人は「清浄光」「歓喜光」「智慧光」が、それぞれ阿弥陀仏の無貪・無瞋・無痴の善根から生み出される光と述べ、これに照らされることによって念佛者の三毒が滅していくと説いている。（『浄土宗全書』9・397下～398上）

まず「愚者」とは、仏教、なかんづく、本宗における人間観を示す言葉であり、「凡夫」と同義であって、単純に「智者と愚者」「賢者と愚者」というように人間の知性を相対的に評価する言葉として理解してよいものではない。

私たち人間はすべからく、「無明」に端を発してこの世に生を受け、生まれながら煩惱にまとわれた存在とされる。それが「凡夫」である。凡夫は、この世での「幸せ」は永続させず、いずれ死が訪れると分かっているながら、この世を「離れがたき輪廻の里」（法然上人「一紙小消息」）と執着し、この世における「永遠の幸せ」を求めてしまう。そのような姿が「愚者」と称され、そこに人間の根源的な苦しみがあり、悲しみがあると言えよう。「愚者」、あるいは「凡夫」という言葉は、「人間とは何か」という、その本質を指す言葉なのである。

次に「愚者の自覚」とは、三心のうちの「深心」における「信機」に相当し、「仏道を歩むに当たり自分自身における人間のありようを、うそ偽りなく省み至らぬ我が身と深く自覚する心」と言ってもいいだろう²⁷。③のなかで「愚者の絶望」と記したが、その絶望とは、「みずから煩惱を断ち切ることこそ仏道である」とする聖道門の立場に立った表現である。人生における絶望が自分自身を深く省みるきっかけとなる場合も多々あろうが、法然上人の教えによれば、深心を含む三心は阿弥陀仏の救いを信じて念佛を称えるなかに具わるとも言われている²⁸。

念佛往生による凡入報土の教えは、生まれながら煩惱にまとわれた人間であるが故に生じる苦しみ、悲しみからの解放につながる教えでもある。したがって「お念佛からはじまる幸せ」は同時に、「苦しみ、悲しみとの決別のはじまり」と捉えたいものでもある。

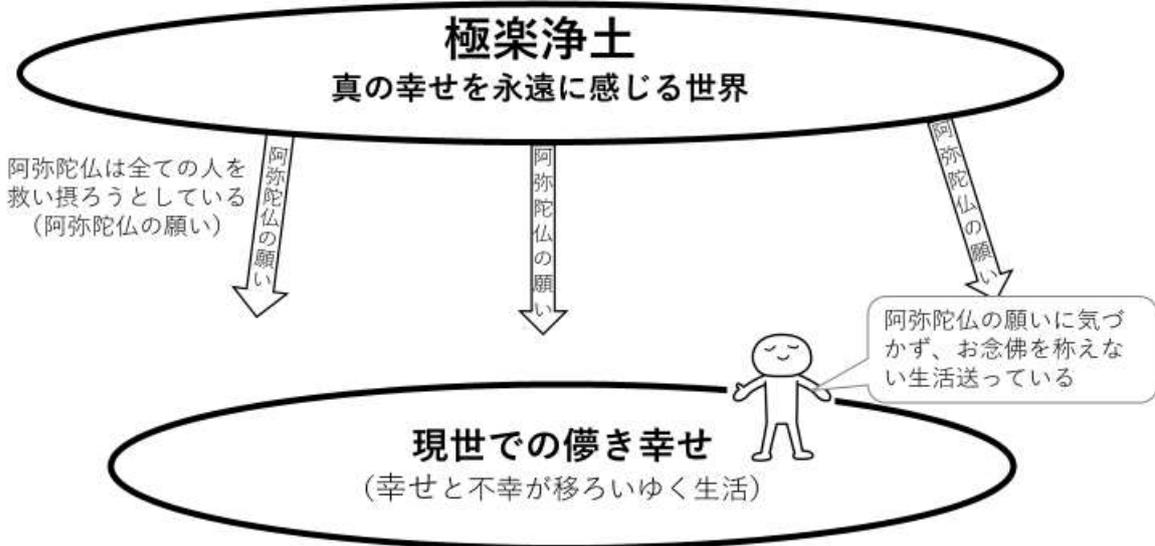
提言として

冒頭、「幸せ」という感覚は社会的要因や個々の主観に委ねられている、と言及した。そうであるならば「お念佛からはじまる幸せ」の事例は、じつはさまざまな念佛者について記した種々の「往生伝」から把握しておく必要がある。あるいは念佛体験の感想など情報として共有できる仕組みを構築しておくことも一案であろう。以上

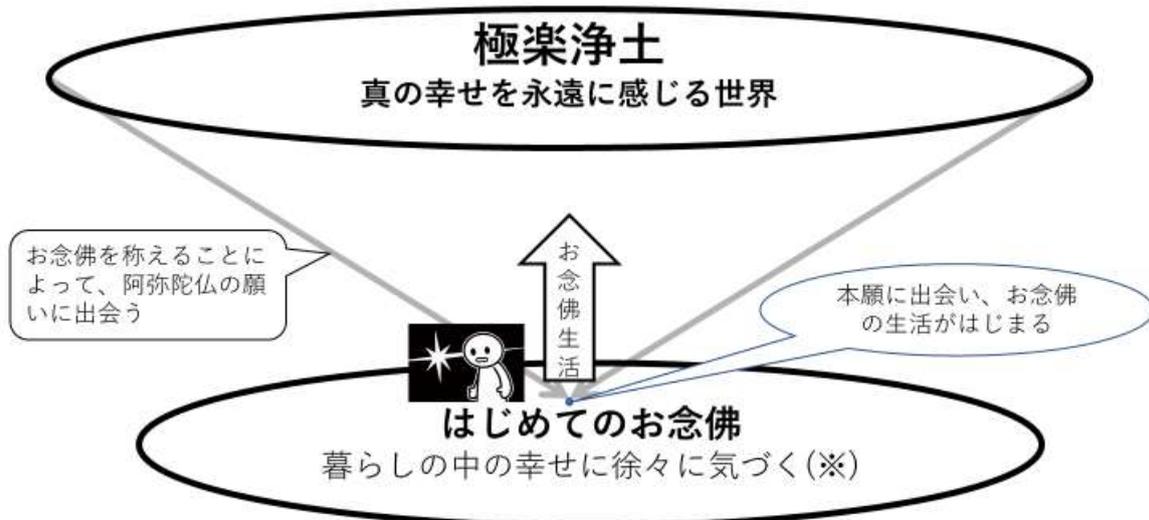
²⁷ 『観経疏』散善義に「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あること無し」（『浄土宗聖典』2・289）と説く。法然上人はこれを受けつつ『往生大要抄』で「始めにわが身の程を信じ」（『浄土宗聖典』4・312）と述べ、自分自身が凡夫であること知ることの重要性を説いている。

²⁸ 『大胡の太郎実秀へつかはす御返事』には「まめやかに往生せんと欲いて念仏申さん人は、自然に具足しぬべき心にてそうろう」（『浄土宗聖典』4・396）と述べられている。

第一段階 現世での儂き幸せ

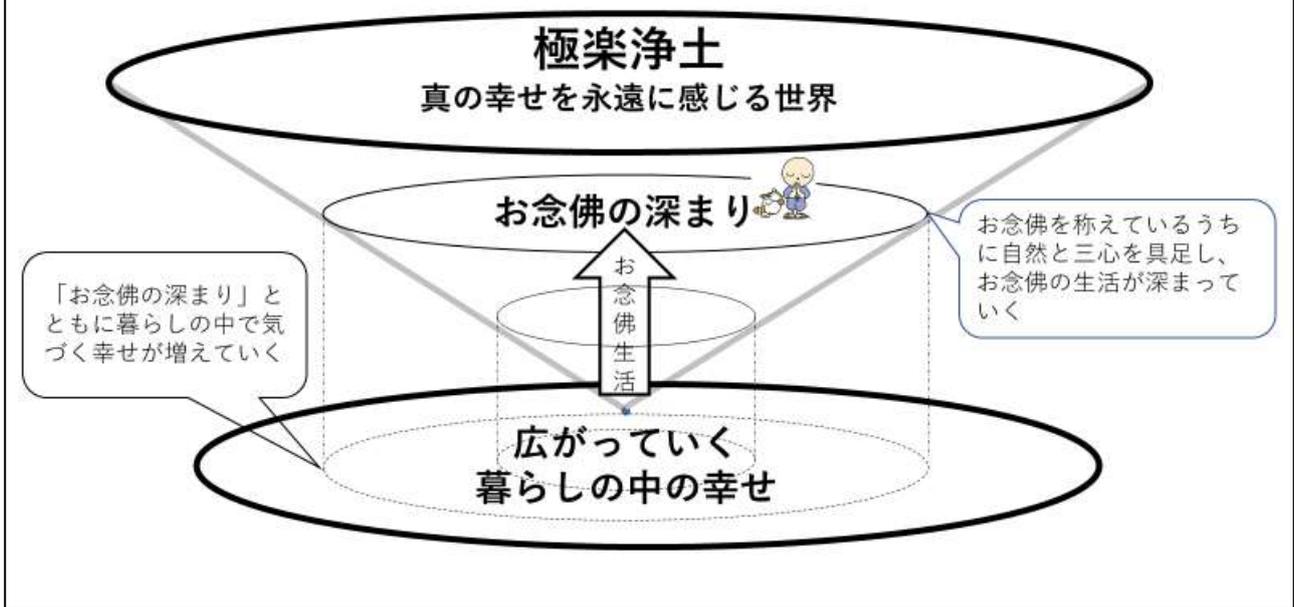


第二段階 お念佛からはじまる幸せ

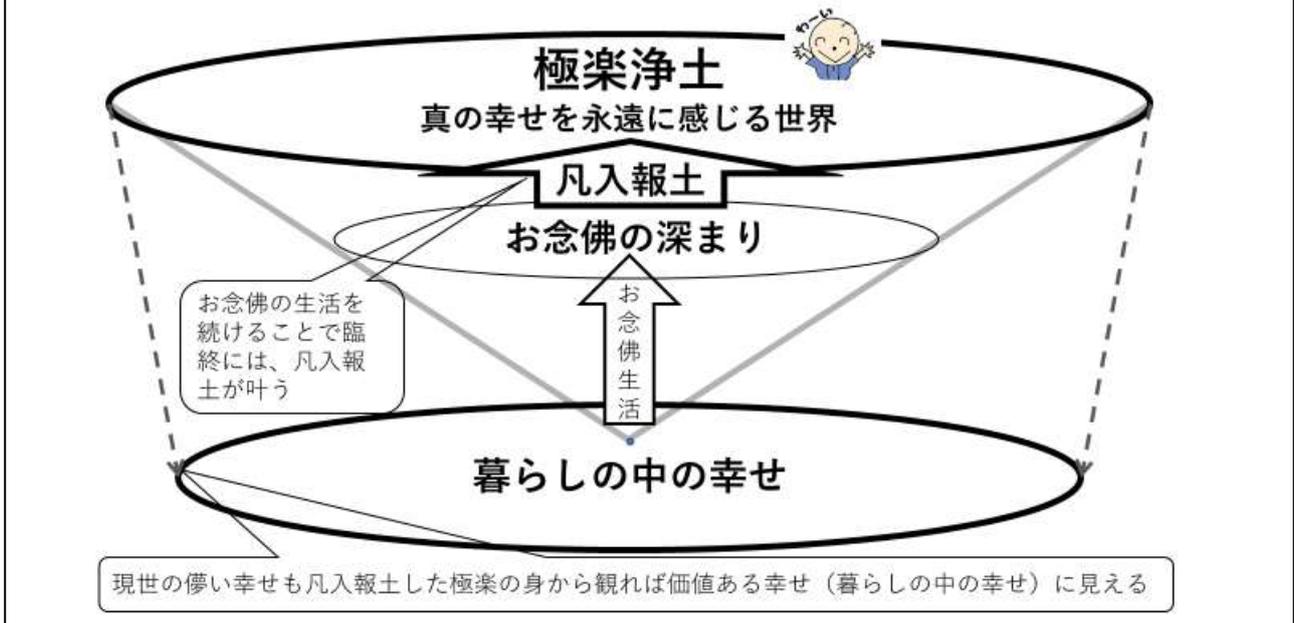


※お念佛を称えることで、阿彌陀仏の願いに気づき、来世では苦のない世界に往生できることを幸せに感じ、現世においても生きることに幸せ(暮らしの中の幸せ)を感じるようになる

第三段階 お念佛が深まりゆくなかでの幸せ



第四段階 真の幸せ



※ 図式は、研究班と開宗 850 年準備事務局との共同制作